



一番走った先に、一番上が待っている。
最後の冬。全ての力を出し尽くせ。
——スタンダード新潟編集部

高校バスケットボール

新潟 頂上 決戦

WINTER CUP 2023

新潟商業

伝統の堅守速攻で つかむ全国

ウインターカップは2013年まで17年連続を含む21回の出場。
新潟県の高校バスケットを長くリードしてきた。
近年は開志国際と帝京長岡の私学2強の厚い壁に阻まれていたが、
堅守速攻を武器に名門の意地を見せる。撮影・文◎わたなべまさひこ (Office Serendipity)



Team
for **Men**
男子注目校

体育館を他の部と共用するため、
質を重視した練習を心掛けている



打倒私学、名門復活への思いを胸に、ウインターカップへと臨む

昨 年のウインターカップ県予選では4校による決勝リーグまで進み、9年ぶりとなる全国大会出場まであと一歩のところまで涙を飲んだ。今年はその悔しさをバネにBSN杯ベスト4、県総体では新潟工業を下して3位となり、北信越総体に3年ぶりに出場した。今年のウインターカップ男子の新潟県出場枠は2校。私学2強の一角を崩さないと全国大会への道は開けない。10人の3年生が全員残り、夢の舞台への挑戦を続ける。

コロナ禍以降は練習時間が短縮され、体育館も他の部活と共用。ハーフコートのみ使用や全くコートを使えない日もあるなど、制限のある中で、工夫を凝らしながら質を重視した練習に励んでいる。今年は県外遠征にも力を入れた。強豪相手に好ゲームを繰り返して、高いレベルの経験を積んできた。「セットプレーなど、練習でやってきたことが試合で生きるのうれしい。固いディフェンスから足を使って走るバスケットが通用した。収穫だった」と、主将の島田聖夢（3年）は手応えを感じている。

また、関西遠征では高さに対する課題が浮き彫りになった。選手たちは夏休み期間を利用して特にシュートタッチやフィジカル面を鍛えた結果、外からのシュートの成功率が上がった。体つきもたくましくなった。

「3年生は雰囲気よくやれているし、夏休みを通してかなり上手になった。人間的に成長し、余裕が出てきているのが要因。それがバスケの視野の広さにもつながっている。ウインターカップ県予選では集大成として力を発揮してほしい」と、チームを率いる信田英樹監督。無類の強さを誇った時代を知る同校OBの指揮官は、選手へ



左から島田蒼、島田聖、ガードの岸本。チームの要として新潟商業の伝統を受け継いできた



新潟商業の堅守を支えるセンターの久保田（右）

の指導にも自然と力が入る。目指すバスケットは変わらない。堅守速攻からスペースを突いて相手を崩す。スタターは3年生、主将・島田聖、エース島田蒼、篠田琥太郎、岸本湊、久保田敦也。昨秋の新潟地区大会では決勝リーグで北越、新潟工業、東京学館新潟を破り3戦全勝で優勝。幸先のいいスタートを切った。その後、大黒柱の島田蒼のケガの影響もあり、BSN杯や近県大会では最低限の目標であるベスト4にも進めなかった。県総体後の北信越総体は初戦で松商学園に僅差で敗れた。そんな紆余曲折を経て、2年生ガードの高橋皇と金子蒼心、3年生のセンター中原拓珠などが頭角を現し、選手層は確実に厚みを増している。「選手たちは全国大会出場にこだわって日々、自分たちのバスケットに磨きをかけて続けている。最後はベストな状態で40分間戦ってほしい」（信田監督）

スピードに乗った鋭いドライブが持ち味の主将・島田聖は、留学生のいる学校を倒して全国大会に出場したいと新潟商業を選んだ。練習中は下級生などにも目を配って声掛けるなど、常に先頭に立ってチームをけん引している。「自分が苦しい時はエースの（島田）蒼汰のプレーをアシストする。得点が決まるとチームが乗っていく。大事な場面でチームを助けられるプレーをしたい」。打倒私学、そして夢の実現に向けて目を輝かせた。



トリプルで攻める金子（左）。「力があるので、どんどん切り込んでほしい」と信田監督の評価も高い



主将の島田聖（左）と共に、チームを引っ張るポイントガードの篠田（右）

パリ五輪出場を決めた日本代表主将富樫勇樹が凱旋。

「W杯以上の結果を目指す」

撮影◎嶋田健一（スタジオ嶋田）



得意の3点シュートを披露すると一段と歓声が大きくなった。「こんなに多くの方が来てくれるとは思わなかったので、すごくいい雰囲気の中でできました」



「ここ数年、地元に戻って子どもたちと触れ合える時間がなかったので、楽しそうにバスケをやってくれてすごうれしかった」



「みんな、さらにバスケが好きになって、次の練習からいろんな努力をしてくれると思う。こういった時間を作れて良かった」



「新発田市の皆さんから熱い声援とメッセージをいただけたからこそ（パリ五輪出場権獲得を）できたと思います」



クリニックのメニューは開志国際高校と考えた。同校の選手や父の富樫英樹監督らと記念撮影。新発田市のスポーツ親善大使にも再任された

千葉ジェッツ所属のプロバスケットボール選手で新発田市出身の富樫勇樹が9月14日、地元で子どもたちにバスケットボールクリニックを行った。

富樫は8月下旬から9月上旬にかけて沖縄で開かれたワールドカップで日本代表の主将として活躍。2024年のパリ五輪出場権を獲得した直後の地元凱旋となった。

クリニックは市内の小学5、6年生90人を対象に実施された。富樫に澤田竜馬ら開志国際高校の4選手も加わりドリブルやシュート、ゲームなどで熱心に指導。地元の英雄を一目見ようと1800人近い観客も詰めかけ、会場の新発田市カルチャーセンターには熱気があふれた。

クリニックについて富樫は満面の笑顔で話した。

「新発田、新潟に限らず、日本中の人がバスケットを見てくれたことは過去に1度もないことだと思います。その中で熱心にバスケットをやっている子どもたちが新発田市にたくさんいる。たくさんの方がワールドカップを見てくれたと感じています。」

（大会が）終わった直後に地元に戻ってクリニックができて、ミニバスの子どもたちと触れ合えたというのは、僕の中ですごく大きい。子どもたちには、プロ選手やその上の日本代表というところを目指してやってほしいなと思います」

開催が来年に迫ったパリ五輪についても代表主将としての意気込みを語った。

「（五輪出場から）特に男子は遠ざかっていたので、東京オリンピックに地元開催で1回出られたこと、それ自体が自分の中ではすごいことだと思っていたんですが、それが2回目のチャンスとして1年後に迫っている。」

ここまで代表としてやって来たので、しっかりと試合に出場して、ワールドカップ以上の結果を目標にやっていきたい。1年後、というか1年もないので、けがをせずにしつかりと成長していきたいと思っています」

〔長岡 2年〕

五十嵐蒼

イガラシソウ

夏の新潟大会3回戦で優勝候補の帝京長岡を7回零封。秋季県大会は3回戦で六日町に敗れたが、体調不良から復帰直後にもかかわらず9回を7安打3失点。エースで4番に秋からは主将の肩書が加わった。強気の投球に責任感の強さが表れる。

PLAYER DATA

177cm/72kg
右投/右打
長岡市立関原中学校

提供/日刊スポーツ新聞社

提供/日刊スポーツ新聞社

PLAYER DATA

168cm/61kg
右投/右打
川口市立芝中学校(埼玉)

〔関根学園 1年〕

鈴木興丞

スズキコウスケ

秋季県大会は6試合中5試合に先発。8-0で8回コールド勝ちした、開志学園との北信越大会第3代表決定戦は、投球数126球、2安打に抑えて1人で投げ抜いた。球威のある直球を軸に、テンポ良く強気の投球で凡打の山を築く。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田)

〔中越 2年〕

高橋駿臥

タカハシシュンガ

最大の魅力はダイナミックな右のオーバースローから繰り出す140キロ台の直球。秋季県大会は4回戦で加茂暁星に9回7安打2失点で惜敗したが、ほとんど直球1本で押しまくった。後半のスタミナや四死球の後にタイムリーを許すなど、まだ不安定な要素は多い。それでも粗削りな分、秋は伸びしろと潜在能力の高さを感じさせた。冬場に土台を固め、直球の精度を高めることで、前チームの大黒柱、野本壮大に匹敵する存在になる可能性がある。

PLAYER DATA

176cm/78kg
右投/右打
長岡市立東北中学校

【投手編】

〔日本文理 2年〕

丸山慶人

マルヤマケイト

秋季北信越大会進出がかかった県大会準決勝の関根学園戦で先発。1-0でリードを守っていたが、9回裏に無死から連打を浴びて追いつかれた。それでも後続を3人で抑えて失点1にとどめ、サヨナラを逃れた。土壇場での踏ん張りが延長10回タイブレーク、4-1での勝利の流れにつながった。自身初の初完封はなかったが、9回156球を投げて8安打7奪三振で1失点。四死球は1つだけ。伸びのある直球とコーナーに決まる変化球が武器。抜群の制球の良さでキレのあるボールを操る。夏の新潟大会は準々決勝の東京学館新潟戦に3番手で登板し、サヨナラ負けを喫した。その悔しさをバネに夏の練習で地力をつけた。この秋は高校で初めて着けた背番号1。秋季県大会は3試合で計20イニングを投げて防御率0.90。右スリークオーター倉石健亮(2年)との二本柱の継投で北信越大会出場を果たした。来年、夏の王座奪回を目指す日本文理の不動のエースになる。

提供/日刊スポーツ新聞社

PLAYER DATA

176cm/65kg
右投/右打
長岡立中之島中学校